劇場用長編映画　オリジナル脚本

まだ、途中。

MADA, TOCHU.

脚本・開発稿

企画・原案

BABANA ELHARJANI BRAHIM

連絡先：BABANA.BRAHIM.U@GMAIL.COM

2026年11月

登場人物

三浦直人（29→32）　物流会社の事務職。人の顔色ばかり見て、自分の希望を口にできない。

佐伯修（63）　元路線バス運転士。公共施設の夜間清掃をしている。

森下晴香（31）　小さな陶器ブランド「凪の器」を一人で営む。率直で、冗談が下手。

加瀬千尋（38）　駅前の小さなジムのトレーナー。説明は短く、観察が細かい。

小野亮介（27）　直人の勤務先の後輩。声は小さいが仕事は丁寧。

田島誠（49）　直人の上司。口下手で忙しい。悪人ではない。

三浦妙子（57）　直人の母。隣県で一人暮らし。

佐伯七海（36）　修の娘。小学生の娘を育てながら働いている。

石田裕介（42）　雑貨店の経営者。直人の最初の事業失敗を見ている。

川原信夫（59）　地元で複数の店を持つ経営者。付き合いが広い。

○1　中央線・車内（冬・朝）

混んだ車内。三浦直人（二十九）がドアのガラスに映った自分を見て、寝癖を指で押さえる。隣の学生たちが、スマートフォンの小さな画面を見て笑う。

直人のスマートフォンに、昨夜会った女性からメッセージが入る。

『今日はありがとうございました。いい方だと思ったんですけど、今回は……』

直人は最後まで読まず、画面を消す。降車駅。押し出されるようにホームへ。

○2　物流会社・事務室（朝）

古い業務システム。直人の画面だけ赤いエラー表示が並んでいる。

田島　「この伝票、また旧フォーマットで送った？」

直人　「……はい。すみません」

田島　「謝る前に、どうしてそうなったか教えて」

直人　「昨日のファイルが……いや、僕の確認不足です」

小野が椅子を寄せる。

小野　「今月から項目変わってます。共有メール、流れてましたけど、見つけにくいですよね」

直人　「分かってる。大丈夫」

小野　「なら、いいですけど」

小野が離れる。直人、また画面を閉じる。誰にも聞かない。

直人の机の引き出しには、更新されないままの作業手順書。二年前、彼自身が作ったものだ。紙の角が折れている。直人は手順書を取り出し、改訂すべきところに付箋を貼る。上司に渡そうとして手を引っ込める。

小野が後ろから覗く。

小野　「それ、三浦さんが作ったんですか。僕、前に助かりました」

直人　「……古いから、もう使わないほうがいいよ」

小野　「直せば、使えません？」

直人は返事をしない。自分の役に立つところを、他人のほうが先に見つけている。

○3　オフィス・休憩スペース（昼）

電子レンジが三台鳴る。直人はコンビニの弁当を食べながら大学時代のグループチャットを見る。

『昨日最高だった！』『次は温泉！』写真には昔の友達が五人。自分だけ知らなかった集まり。

直人は「楽しそうだね」と打って消す。

同僚「三浦さん、金曜、うちのチームで飲むけど来ます？」

直人「いや、たぶん邪魔になるんで」

同僚「邪魔って（笑）。了解です」

同僚たちが去る。直人は弁当を閉じる。半分以上残っている。

○4　駅前の喫茶店（夕方）

先日会った女性・美月と、最初のデートを思い出すように短い会話が続く。

美月「休日、何するのが好きなんですか」

直人「特にないですね」

美月「一個くらいありますよね。私、最近、変な形のコップ集めてて」

直人「……すみません。僕、つまんないですよね」

美月「え。私、まだそんなこと言ってないです」

美月の笑顔が少し困ったものになる。

直人「いや、先に言っといたほうが……」

美月「先に決められちゃうと、私が話すことなくなっちゃいます」

思い出が途切れる。

美月はスマートフォンを裏返して、テーブルに置く。

美月「私、今日、仕事帰りなの。けっこう疲れてるけど、話したくて来たんです」

直人「すみません」

美月「だから謝らなくていいって。……あの、私の話、興味ない？」

直人「そんなことないです」

美月「だったら、一個くらい質問してよ」

直人が口を開き、閉じる。

後日届いた断りのメッセージが、ここで初めて理解できる。彼女は冷たかったわけではない。

○5　直人のアパート（夜）

六畳の部屋。洗濯物、レシート、片方だけの靴下。机の上に読みかけの資格本。テレビでは同世代の起業家が「好きなことをやればいい」と笑っている。

直人はテレビを切る。真っ暗になった画面に自分の顔。

母・妙子から着信。「ご飯食べてる？」。直人は「食べてる」と返信し、カップ麺の容器を流しに置く。

鏡の前でシャツの裾を引っ張る。髪を直す。やめる。

○6　会社・会議室（翌日）

大口の出荷先でラベルの取り違えが発生。田島が各担当に状況を聞いている。直人の修正作業の遅れも一因だった。

田島「分かった。先方にはこっちから謝る。三浦、今日は小野と一緒に直して」

直人「……一人でできます」

田島「一人でやれって言ってない」

誰も怒鳴っていない。直人には、それがかえってつらい。

ほかの担当が状況を説明する間、直人は何度も「自分のせいです」と言いかける。田島は冷静に原因を分けていく。

田島「入力ミスは三浦の確認不足。手順書の更新漏れはこっちの管理。二つあるんだよ」

小野「変更のメールも、一通だけでした」

田島「そこも直そう」

誰も直人を全面的に責めていない。しかし、直人は自分の存在そのものが失敗だと思い込んでいる。

○7　ビルの階段・踊り場（夜）

残業後。直人が小野からの電話を取る。

小野（電話）　「三浦さん、あれ、明日の朝僕がやっときますよ」

直人　「悪い。いつも」

小野　「大したことないです。あ、あと……」

直人　「ごめん、もういい」

電話を切ってしまう。すぐに自分からかけ直そうとするが、できない。

スマートフォンに、昔の友達の結婚式の写真。「幸せそう」と呟く。

○8　多摩川沿い・遊歩道（深夜）

人通りのない遊歩道。遠くに電車の音。直人は立ち止まったまま動かない。危うい考えが頭から離れない。

足元の水たまりに街灯が揺れる。しばらく、音は風だけ。

背後から缶が二本触れ合う音。

佐伯（声）　「あっつ」

振り向くと、作業着の男・佐伯修（六十三）が温かいお茶を持っている。

佐伯　「自販機、押し間違えた。甘いの欲しかったのに、両方お茶だ」

佐伯は少し離れたベンチに座り、一本を空いている側に置く。

佐伯　「いらなきゃ、置いといて」

直人は動かない。

直人は声のしたほうを見たあと、また川へ顔を向ける。

佐伯　「ここ、風が強いな。向こうの建物の陰のほう、少し暖かい」

返事がない。佐伯は少し離れて待つ。

佐伯　「俺も今、急いで帰っても、誰も起きてないんだよ」

その一言は、同情でも勧誘でもない。直人は答えず、もう一度だけ佐伯を見る。

○9　同・ベンチ（続き）

直人がベンチの端に腰を下ろす。缶には触れない。

佐伯「寒いな」

直人「……そうですね」

長い沈黙。

直人「何か用ですか」

佐伯「ないよ。もう帰るところ」

直人「じゃ、帰ればいいじゃないですか」

佐伯「そうだな」

佐伯は立たない。

直人「……僕、何やってもだめなんです。仕事も、人と話すのも」

佐伯「うん」

直人「彼女もいないし、友達も……自分がいなくなっても、困る人なんか」

佐伯「それは、俺には分からん」

直人「でしょうね」

佐伯「分かんないから聞いてる。今日は、家に帰れそうか」

直人が答えるまで、佐伯は黙っている。

直人「こういうの、迷惑ですよね。知らない人に」

佐伯「迷惑かどうかは、俺が決めるよ」

直人「……僕、ずっと、そういうの先に決めちゃうんです」

佐伯「そっか」

佐伯はポケットを探り、使いかけのティッシュを出しかけて引っ込める。何か気の利いたことを言おうとして、やめた顔。

佐伯「……お茶、冷めるぞ」

直人がようやく缶を取る。まだ熱い。

○１０　同（少し後）

直人「もう、全部間違えた気がします」

佐伯「道？」

直人「人生です」

佐伯「でっかいな」

直人、不意に笑いそうになって、すぐに顔を伏せる。

佐伯「俺、バスの運転手だったんだよ。道間違えると大ごとだ。黙って走ってたら、もっと大ごとになる」

直人「人生、バスじゃないですけど」

佐伯「それはそうだ」

佐伯は缶を両手で包む。

佐伯「でもさ。道、間違えたと思ったら、戻ったっていいだろ。戻れなかったら、別の道を探せばいい。ここで終わりにしなくたって」

直人「そんなの、どうやって」

佐伯「明日の朝、靴履いて外に出てみ。五分でいい」

直人「五分？」

佐伯「俺が今、言えるの、それくらい。来週のことまで約束できないから」

直人「……五分歩いたら、何か変わるんですか」

佐伯「変わんないかもな。でも、今日と同じ一日じゃなくなる」

直人「戻ったら、また同じとこですよ」

佐伯「そうかもな」

直人「また失敗して、また嫌われて」

佐伯「……あのさ。お前、さっきから、まだ起きてないことまで全部決めてる」

直人「……」

佐伯「俺は明日、腰が痛くて起きられないかもしれない。雨かもしれない。だから『明日から人生変えろ』とは言えない」

佐伯が横を向く。自分の足元を指す。

佐伯「でも、まず靴、履く。そこからなら、言える」

直人「そんなの、誰でも……」

佐伯「できる日と、できない日がある。できない日は、また次の日だよ」

直人は大きく息を吐く。自分の人生が一度に全部変わるわけではないと分かったことが、なぜか少し楽だ。

○１１　同（さらに後）

直人「体も、だらしなくて。女の人と話すと、頭、真っ白になって」

佐伯「じゃ、体動かしてみれば。ジムとか」

直人「ジムって、あの、すごい人ばっかりの」

佐伯「そういう人ばっかりでもなかったぞ。俺、腰が悪くて見学だけした」

直人「行かなかったんですね」

佐伯「入会金が高かった（笑）」

直人、今度は少し笑う。

佐伯「誰かに好かれようとするのもいいけどさ、自分が何好きかも分かんないままじゃ、話しにくいだろ。何か一つ、面白がれるもん探してみろよ」

直人「……そんなの、あるかな」

佐伯「ないなら、探すとこからだ」

直人「……でも、女の人って、結局、かっこいい人が好きじゃないですか」

佐伯「好きな人もいるだろうね」

直人「僕なんか、話してもつまらないし」

佐伯「それ、相手が決めることだって。先に『僕なんか』って言われたら、相手も困るぞ」

直人「……そう言われました。似たこと」

佐伯「じゃ、次は、その人の話、聞いてみればいい。自分の話も、ちょっとして」

直人「話すこと、ないです」

佐伯「だから、面白がれるもの探せって言ってるの」

少し間があって、佐伯が自分の作業着を見下ろす。

佐伯「ま、俺の趣味は、安いお茶見つけることぐらいだけど」

直人は、こらえきれず笑う。

佐伯は声を落とす。

佐伯「けど今夜は、それより先にやることがある。俺、あんたを一人で帰していいか、ちょっと心配だ」

直人、黙って首を振る。

佐伯「分かった。誰か呼べる？　家族でも、友達でも。ここで一緒に待つ」

直人は震える指で母の番号を押す。

○１２　夜明け前・ファミリーレストラン

妙子が駆けつけている。佐伯は離れた席で、冷めたコーヒーを飲んでいる。

妙子「来てくれてありがとう。こんな時間に」

佐伯「近くにいたんで」

直人「……母さん、言わないでよ」

妙子「何を」

直人「もっと頑張れとか」

妙子「言わないよ。……ご飯、食べられる？」

直人は首を振る。

妙子「じゃ、温かいのだけ」

帰り際、佐伯が直人に小さなレシートを渡す。裏にボールペンで『５分』。

佐伯「名前、佐伯。たまたま、ここにいたおっさん。忘れていいから」

直人「……忘れません」

佐伯「そうか。じゃ、またどっかで」

佐伯は自分の帰るバスがまだないことに気づき、小さくため息をつく。

妙子は会計を済ませるため席を立つ。直人が佐伯のほうへ向かう。

直人「……あの、さっき、死ぬこと考えてました」

佐伯「……そうか」

直人「おじさんが来なかったら、今、ここにいないかも」

佐伯は軽くうなずくが、得意そうな顔をしない。

佐伯「今日、ちゃんと話せたな。お母さんとも。……次、つらくなったら、一人でそこまで行く前に、誰か呼べよ」

直人「……はい」

佐伯は紙ナプキンでテーブルの水滴を拭く。直人のほうを見ない。

○１３　心療内科・待合室（数日後）

妙子がついてきたが、診察室には直人一人で入る。医師が睡眠や食事、危機の再発への備えを確認する。

医師「眠れない状態が続いていますね。いったん仕事のことも含めて、一緒に整理しましょう」

直人「変われますか、僕」

医師「今は『変わらなきゃ』より、安全に休めることを優先しましょう」

直人はうなずく。帰り、次回の予約票を財布の奥にしまう。

診察室から出ると、妙子がすぐには何も聞かない。二人は院内の自販機の前で足を止める。

妙子「何飲む？」

直人「水でいい」

妙子「うん」

妙子は水と温かいお茶を買う。

直人「母さん、ごめん」

妙子「……それ、また今度でいいよ」

直人はうなずき、病院の出口へ向かう。

○１４　直人のアパート（早朝）

六時四十分。スマートフォンのアラーム。直人は目を閉じたまま。

七時十分。ようやく起き、玄関で靴を履く。階段を途中まで下り、引き返す。

部屋でレシートの裏を見る。『５分』。

もう一度靴を履く。外の空気は冷たい。家の角を曲がって、すぐ戻る。

スマートフォンのタイマーは、二分四十二秒。

直人　「……短っ」

レシートを机に置く。寝る前、裏側に『2:42』と小さく書く。

○１５　会社・会議室（数日後）

直人が診断書を持ち、田島と話している。

直人　「しばらく、休ませてください」

田島　「分かった。引き継ぎはこっちでやる。小野にも頼む」

直人　「……迷惑かけます」

田島　「迷惑は、仕事で返せばいい。今は休んで」

田島は不器用にお茶のペットボトルを差し出す。

田島　「これ、持ってけ。さっき二本買っちゃった」

直人は思わず佐伯を思い出し、少し笑う。

○１６　住宅街（春・朝）

短い日々の断片。晴れた日に五分。雨の日は玄関を開けるだけ。調子のいい日に公園まで。調子の悪い日は何もしない。

直人のメモには『５分』『７分』『０分』『６分』。

母とスーパーで買い物。たった二つの食材で野菜炒めを作る。焦げる。母は味見して「食べられる」と言う。

直人が笑う。その笑い方に、本人が驚いている。

夜。直人が冷蔵庫の前で、カップ麺を取ろうとしてやめる。代わりに卵と冷凍野菜を出す。

別の日。ジムのホームページを開き、入会金を見て閉じる。翌日また開く。

休み明け、母が帰る。直人は駅まで見送り、改札の前で「今度はこっちから行く」と言う。妙子は「無理しないで」と笑う。

彼女の姿が消えたあと、直人はしばらくそこにいる。前ほど怖くない一人の時間。

○１７　駅前ジム・受付（春・夕）

受付の若い男性が施設を説明する。直人、いかにも慣れたふりをする。

受付「運動のご経験は？」

直人「昔、体育で……」

受付「はい」

直人「……それだけです」

奥からトレーナーの加瀬千尋（三十八）。

千尋「じゃ、ちょうどいいですね。何も知らない人のほうが、変な癖なくて」

直人「筋肉、つきますか」

千尋「続けばね。まず、来週も来られるくらいにしましょう」

○１８　ジム・トレーニングエリア（続き）

直人、軽い重りに挑戦。顔をしかめる。

千尋「息、止めないで」

直人「……はいっ」

千尋「隣の人見なくていいから」

隣では年配の女性が自分のペースで運動中。

年配女性「初めて？　私も最初、扉開けるの三回失敗したよ」

直人「……そうなんですか」

年配女性「今日もう入ってるじゃない」

直人、笑う。帰りに会員証を落とし、拾ってもらう。

○１９　直人の部屋（初夏・夜）

求人動画。成功者の生活。直人は見て落ち込む。次に、女性に好かれるための動画。途中で閉じる。

鏡の前で髪を整え、服を着替える。まだ似合っていない。

冷蔵庫の扉に貼った小さな紙には『散歩、ジム、水曜』。

翌朝、直人は少しだけ寝過ごす。それでも散歩に出る。

○２０　会社・事務室（初夏・午前）

短時間勤務で復帰。小野が新しい業務マニュアルを見せる。

小野「これ、先月作ったんです。三浦さんが前に言ってた『誰も最新版が分からない』ってやつ」

直人「俺、言ったっけ」

小野「言ってました。二回」

直人「……よく覚えてたね」

小野「こっちは困ってたんで」

直人が笑い、画面に顔を寄せる。

直人「この順番、逆にしたほうが間違えにくいかも」

小野「それ、いいですね」

直人は初めて自分の意見を最後まで言う。

小野「三浦さん、これ、見てもらってもいいですか」

直人は一度「小野のほうが詳しいだろ」と言いかける。

直人「……いいよ。どこ？」

画面には複数の店から来た注文データ。送り先の表記がばらばらだ。

直人「これ、元のデータを無理に一緒にするより、最初に形式だけそろえたほうが早いかも」

小野「そうか……。店によって違うんですよね」

ふたりで十五分ほど試す。直人は、時間が過ぎるのを忘れる。

小野が驚く。

小野「三浦さん、こういうの、やってる時だけ早口ですね」

直人「……そう？」

自分でも気づかなかった。

○２１　ジム・更衣室（梅雨）

トレーニング後、直人のＴシャツは汗で濡れている。体重計の数字は昨日とほぼ同じ。

直人「全然変わんない」

千尋「数字？」

直人「全部です」

千尋「じゃ、最初の日と比べてみる？」

千尋は記録をめくる。最初の軽い重りを、今日は余裕で持てている。

千尋「あとさ。最初の日、受付で声かけても返事聞こえなかった」

直人「そんなに？」

千尋「うん。今、聞こえる」

千尋はもう次の利用者に向かう。直人は鏡を見る。

○２２　駅前・美容室（梅雨）

美容師「どうします？」

直人「……清潔感、ある感じで」

美容師「それ、みんな言うんですよ（笑）。短くしていいですか」

直人「お願いします。あ、でも、短すぎると……」

美容師「途中で聞きます」

切られた髪が床に落ちる。仕上がった顔は別人ではないが、目が見える。

直人、店の窓で何度も自分を見る。歩いているうち、少し背筋が伸びる。

○２３　居酒屋・会社の小さな飲み会（初夏・夜）

直人が以前なら断った会に来ている。隣の小野に「これ、おいしいね」と話しかける。

同僚「三浦さん、なんか変わりました？」

直人「髪切った」

同僚「いや、もっと……なんか、こっち見てしゃべる」

直人、照れる。

奥で二人が旅行の話。誘われなくても近づいて聞く。

直人「それ、どこの温泉？」

会話は普通に続く。大騒ぎにもならない。その普通さが、直人にはうれしい。

帰り際、同僚の一人が、みんなで撮った写真を送ってくれる。

同僚「これ、三浦さんに送っていいですか」

直人「もちろん」

写真の直人は、ややぎこちない笑顔で端に写っている。以前なら拡大して粗探しをした。今日はそのまま保存する。

帰りの駅で、さっき話した同僚に小さく手を振る。向こうも手を振り返す。

○２４　商店街・陶器店「凪の器」（夏・夕方）

直人、ジム帰りに軒先の段ボール箱を落としそうになる女性を手伝う。森下晴香（三十一）。

晴香「ごめんなさい、そっち持ってもらっていいですか」

直人「はい。……割れ物ですか」

晴香「全部そうです」

段ボールに、手書きの住所。伝票が何枚も重なっている。

直人「これ、発送ですか」

晴香「明日、たぶん。うまくいけば」

直人「品番、どこで管理してます？」

晴香「え？」

直人「……すみません。仕事の癖で」

晴香「仕事で人の段ボール見るんですか」

直人「物流の事務で」

晴香「じゃ、ちょっと見てってください。ひどいんで」

晴香のエプロンには乾いた土がついている。袖の端を指で払う。

晴香「店、広く見えるでしょ。でも奥の棚、全部、発送待ち」

直人「……売れてるんですね」

晴香「売れないよりいいけど、作る時間なくなるのが一番困る」

直人「僕、箱のことなら分かるんですけど、陶器のことは何も知らないです」

晴香「私も物流のこと、何も知らない。ちょうどいいんじゃない？」

直人は、一人で何かを全部知っていなければならないわけではないと思う。

○２５　凪の器・作業場（続き）

小さな工房。棚には湯呑みや小皿。作りかけの陶器。晴香がノートを見せる。

晴香「ネットの注文、紙に写して、その紙見て包んで、住所書いて……たまに一個忘れる」

直人「これ、注文番号ごとに並べて、伝票と一緒にすると……」

晴香「難しいソフトは嫌です」

直人「ソフトじゃなくても、表でできます」

晴香「表……」

直人「僕、そういうのは少し得意です」

初めて『得意』と言う。晴香はその言葉に反応する。

晴香「少し得意、どれくらい？」

直人「……そこそこ」

晴香「じゃ、そこそこ頼んでいいですか」

直人、予期せず笑う。

○２６　直人の部屋（夏・夜）

直人が発送順の簡単な一覧表を作っている。途中、メールで「これを一回試してみませんか」と晴香に送る。何度も敬語を修正する。

返事『めっちゃ助かる。でも色が怖い（笑）』。

直人は表の真っ赤なセルを見る。薄い灰色に直す。

その横にジムバッグ。時計は二十二時。

直人「……明日、起きられるかな」

翌朝、起きられない。それでも仕事へ向かう。

○２７　凪の器（数日後・午後）

発送テスト。晴香が注文品を確認し、直人が伝票を印刷。ふたりの手が交差する。

晴香「あれ？　この人、湯呑み二個じゃなかった？」

直人「……三個になってます」

晴香「なんで」

直人「僕が上の行、コピーしたからです」

沈黙。

直人「すみません。今、元の注文見て直します」

晴香「うん。……ちゃんと言ってくれる人でよかった」

直人「褒められてないですよね、それ」

晴香「まだです」

晴香は笑う。直人も笑う。

晴香が注文を照合する間、直人は一覧表の欄を一つ減らし、文字を少し大きくする。

晴香「……こういうの、仕事終わってから作ってるの？」

直人「はい。好きなんです、こういうの」

晴香「変わってるね」

直人「……そうですか」

晴香「褒めてる。私、細かいこと、すぐ投げ出すから」

直人の顔が明るくなる。褒められるために得意なことを探していたのに、得意なことをしていたら誰かが喜んでくれた。

○２８　帰り道・バス停（夕方）

直人がバスを待つ。時刻表。『折返し』という表示が目に入る。

あの夜の佐伯の声が短くよみがえる。

佐伯（声）「戻れなかったら、別の道を探せばいい」

直人はスマートフォンで、小規模ネットショップの発送支援を調べる。

画面には費用や税務の情報、失敗談。簡単ではなさそうだ。それでも閉じない。

第二部　歩き出す人

○２９　商工会の相談窓口（夏・午後）

相談員の女性が、直人の手書きメモを読む。『発送の間違いを減らすサービス』。

相談員「会社を作りたいんですか。それとも、まず副業で試したい？」

直人「……そこから分からないです」

相談員「なら、そこからでいいです。初めてですもんね」

彼女は収支、業務範囲、保険、契約の確認事項を紙に書く。直人は必死にメモする。

相談員「運ぶ仕事そのものは、許可が必要な場合があります。今考えているのは受注整理と梱包作業ですよね」

直人「はい。配送は既存の会社にお願いするつもりです」

相談員「そこ、企画書にもちゃんと書きましょう」

直人のノートに、はっきりとした線が一本引かれる。

○３０　ジム・ストレッチスペース（夏・夜）

直人が千尋に話す。

直人「この前、事業の相談行ってきました」

千尋「へえ。何やるの」

直人「小さいお店の発送を手伝う仕事。……まだ全然ですけど」

千尋「いいじゃん」

直人「絶対失敗しますよね」

千尋「絶対って、今決まる？」

直人「……決まらないです」

千尋「じゃ、脚、もう十回」

直人は笑って、足を動かす。

○３１　凪の器・店内（夕）

晴香が小さな紙袋を直人に渡す。中は欠けた湯呑み。

晴香「これ、商品にはできないけど、まだ使えるから」

直人「いいんですか」

晴香「その代わり、今月の作業代ちゃんと請求して」

直人「お金もらうほどのこと、してないです」

晴香「してる。こっちは頼んでるんだから」

直人、ためらいながら請求書に九千円と書く。

晴香「安すぎない？」

直人「最初だから」

晴香「最初の人に安くすると、あとで困るよ」

直人は、その言葉もノートに書く。

晴香「この九千円、誰からもらうと思ってる？」

直人「森下さんから」

晴香「うん。私、売上の中から払う。だから、ちゃんと払った分、仕事してくれたらいい。遠慮されると逆に困るよ」

直人が請求書を少し離して見る。

直人「……仕事なんですね」

晴香「最初から仕事だよ。あなたが気づいてなかっただけで」

晴香はレジの引き出しから支払いの控えを出す。直人は両手で受け取る。

○３２　アパート・台所（夜）

割れた湯呑み。直人がそこにお茶を注ぐ。少し傾いているが、漏れない。

妙子に電話。

直人「今日、仕事で九千円もらった」

妙子（電話）「え、すごいじゃない」

直人「材料とか交通費で、たぶん赤字」

妙子「じゃあ、商売の勉強代か」

直人「……そうかも」

妙子「ところであんた、ちゃんと寝てる？」

直人「今から寝る」

電話を切る直人。パソコンをまた開きかけ、閉じる。

○３３　小さな雑貨店・倉庫（初秋・昼）

紹介を受けた石田が直人の説明を聞く。棚にはネット販売用の雑貨がぎっしり。

石田「うち、月に百五十件くらい。全部任せたら、いくら？」

直人「保管はここで、僕が週三回伺うなら……」

石田「大手の代行より高いよ」

直人「そうですね。数が少ない分、安くはできないです」

石田「それ言っちゃうんだ」

直人「……でも、誤発送を減らせるように、一緒に手順を作れます」

石田は書類を戻す。

石田「悪いけど、今はいいや」

直人、出口まで来て一度振り向く。

直人「断ってくれて、ありがとうございました」

石田「変な人だな」

直人「……練習になったんで」

石田は初めて笑う。

石田は説明の途中で何度も質問を挟む。

石田「もし一個なくなったら、誰が責任取る？」

直人「契約で決めたいです」

石田「契約作ったことある？」

直人「……これから専門家に確認します」

石田「じゃ、その後で持ってきな」

直人の背中が少し丸くなる。それでも声を保つ。

直人「分かりました。来月、もう一度来てもいいですか」

石田「いいよ」

不採用のように感じたはずの会話に、次の約束が残った。

○３４　駅ホーム（帰り）

直人が千尋にメッセージ。『営業、初の空振り』。

返事『フォーム崩れてない？　今日はゆっくり休んで』。

直人は思わず声を出して笑いそうになる。

向かいのホームに、互いのスマートフォンを覗き込む恋人たち。以前のような刺すような痛みはない。

○３５　スーパー・レジ（休日）

直人が買い物をする。レジの女性に「袋は？」と聞かれ、はっきり「大丈夫です」と答える。

外で小野に出くわす。

小野「あ、三浦さん。休みなのにちゃんと外にいる」

直人「お前さ、俺を何だと思ってる？」

小野「いや、去年、ずっと休憩室にいたから」

直人「……そうだったな」

小野「最近、楽しそうです」

直人「うん。ちょっと」

小野「それならよかったです」

小野は急いで駅へ。直人は「今度、飯でも」と声をかける。小野が振り向いて、うれしそうにうなずく。

○３６　凪の器・作業場（秋・夜）

晴香が窯から出した小皿を並べている。

直人「全部、色が違うんですね」

晴香「同じつもりなんだけどね」

直人「失敗？」

晴香「そう。……でも、同じの作れないから、面白いのかも」

直人は自分の赤字の伝票を見て苦笑いする。

晴香「三浦さん、今度、商店街の夜市、手伝ってくれません？」

直人「仕事として？」

晴香「仕事じゃないほうで」

直人は答えを探す。

晴香「嫌なら別に……」

直人「行きます。行きたいです」

晴香、笑って「じゃ、決まり」。

晴香「昔は会社勤めしてたんだけど、毎日、数字見てた。売り場に並ぶものは何でも、回転率と粗利」

直人「……だから数字に強いんですね」

晴香「数字から離れたくて土こね始めたのに、今度は売上見ないと続けられない。笑えるでしょ」

直人「……難しいですね」

晴香「でも、今日は作りたい形できたから、いい日」

晴香は小皿を一枚、照明にかざす。

晴香「これ、飲み物入れる器じゃないよ。うちのおばあちゃんが、小さいお菓子のせてた形」

直人がのぞきこむ。そこで初めて、陶器がただの商品ではなく、誰かの生活の記憶だと知る。

○３７　商店街の夜市（秋・夕方）

提灯、焼きそば、手作りアクセサリー。直人が晴香の屋台で釣り銭を渡す。

女性客「これ、彼氏さんが作ったの？」

晴香「違います。この人、発送の人」

直人「『発送の人』って」

晴香「便利なんだよ、説明が」

ふたり笑う。

晴香の作品を手にした中学生が値段を見て戻す。晴香が小さな箸置きを差し出す。

晴香「こっちは、お小遣いで買えるよ」

中学生が笑う。直人は晴香の顔を見る。こんなふうに誰かと話したいと思う。

○３８　夜市の片づけ（深夜）

晴香が折りたたみ机をたたむ。直人が先に手を出して手を挟みそうになる。

晴香「ちょっと、勝手に触らないで」

直人「すみません」

晴香「怒ってないよ。そこ押すと指挟むから」

直人、手を止めて聞く。

晴香「……今、ちゃんと聞いたね」

直人「普段、聞いてないですか」

晴香「たまに先回りする」

晴香は机を閉じ、少し歩いてから言う。

晴香「でも、今日は楽しかった」

直人「僕も」

直人の言葉は短い。それで足りる。

○３９　会社・休憩室（秋・昼）

同僚たちが直人の変化を話す。

同僚「三浦さん、筋トレ何してるんすか。肩やばいっすね」

直人「全然だよ。ちゃんとやってる人からしたら」

同僚「いや、最初より全然違うでしょ」

ほかの女性社員も会話に入る。

女性社員「この前、駅で見かけた。誰か分からなかった」

直人「そんなに変わりました？」

女性社員「髪型ね。あと、歩くの早い」

直人は顔を赤くする。小野が横で笑う。

小野「よかったっすね、三浦さん」

直人「……うるさい」

○４０　カフェ・テーブル（秋・夕）

直人が見積書を作っている。晴香が横からのぞく。

晴香「なんでこの欄、ゼロ円？」

直人「梱包材の準備はサービスで……」

晴香「私なら払うよ。やってもらうほうが助かるし」

直人「でも、高いと思われたら」

晴香「安いから頼むって人もいるし、高くても任せたいって人もいる。選ぶのは相手でしょ」

直人、金額を入れ直す。

直人「……森下さん、営業やったことあります？」

晴香「前職で八年。売れない家電を山ほど売ってきた」

直人「えっ」

晴香「焼き物屋さん、生まれつきできるわけじゃないです（笑）」

直人は、新しいことを知った顔で晴香を見る。

晴香は伝票をひっくり返し、直人の計算を見直す。

晴香「これ、時給にしたらいくら？」

直人「……えっと」

晴香「数字好きでしょ。やってみて」

計算すると、最低賃金よりずっと低い。直人は笑えない。

晴香「お願いする側としても、倒れられたら困るんだよ。続けるなら、ちゃんと続けられる値段にして」

直人は、さっきまで憧れだった『起業』という言葉が、急に日常の仕事に変わるのを感じる。

○４１　雑貨店・倉庫（秋・再訪）

石田が新しい見積書を受け取る。

石田「前より高くなってる」

直人「はい。前はちゃんと計算してませんでした」

石田「正直だね」

直人「週二回、まず三週間だけどうですか。手間が減らなかったら、その時点で終わりで」

石田は考える。

石田「……分かった。試す」

外へ出た直人は誰もいない路地で小さく拳を握る。転びそうになり、壁をつかむ。

○４２　雑貨店・出荷スペース（三週間後）

注文番号と箱が整然と並ぶ。石田が何か探している。

石田「三浦さん！　青いほうの注文、どこ？」

直人「今日の一覧にはないです。明日発送分かも」

石田「違う、急ぎで頼まれた！」

慌てて確認すると直人の入力漏れ。

顧客からの問い合わせが入る。石田の顔色が変わる。

石田「これ、うちの評判が落ちるんだよ」

直人「……はい。僕の確認漏れです。今すぐ対応します。追加費用も、僕が負担します」

石田「まず客に連絡。順番間違えないで」

直人は大きく息を吸い、電話をかける。

顧客への電話。相手は怒鳴らないが、声が硬い。

直人「こちらの入力ミスでした。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。代わりの商品を早急に手配します」

客（電話）「明日の午前には必要だったんです。遅れるなら、先に知らせてほしかった」

直人「……はい。その通りです」

電話が切れたあと、直人は一度だけ壁に手をつく。石田は何も言わずに待つ。

直人「……確認の工程、ひとつ増やします。僕がいない日でも誰でも分かるように」

石田「よろしく」

直人は表を修正する。手が震えなくなるまで、少し時間がかかる。

○４３　雑貨店の外（夜）

謝罪と代替手配が終わったあと。石田が缶コーヒーを二本持っている。

石田「今日、途中で逃げるかなと思った」

直人「僕も逃げたかったです」

石田「だろうな」

直人「……続けていいですか」

石田「来週の分、もう入ってるから」

直人「え？」

石田「次は確認してね」

直人は笑う。コーヒーは苦い。

○４４　アパート・夜

直人がジムを休み、請求書を作っている。カレンダーには運動の予定を三回消した跡。

千尋から短いメッセージ『休んでてもいいから、寝ろよ』。

直人は立ち上がり、鏡を見る。最近の無理が顔に出ている。

腕立てをしようとして、途中でやめる。シャワーを浴び、寝る。

○４５　多摩川沿い・散歩道（秋・午後）

晴香と直人がコンビニの温かい飲み物を持って歩く。

晴香「なんでこんな仕事始めたの？」

直人「……去年、ちょっと、しんどくて」

晴香「うん」

直人「何にもできないと思ってた時、知らないおじさんと話して。『別の道探せばいい』って」

晴香「それで発送？」

直人「自分でも、こうなると思ってなかった」

晴香「その人、今どこに？」

直人「分かんないんです。名前しか」

晴香「じゃ、いつか会えたら、ちゃんとお礼言わないとね」

直人「……そうですね」

直人は缶を両手で持つ。佐伯がしていたのと同じ持ち方。

直人「佐伯さんって、年配の人で。……何か、すごい人だったのかな」

晴香「知らないの？」

直人「知らない。清掃の仕事帰りだった」

晴香「じゃ、その人も、いろいろあるかもね」

直人「そうですよね」

晴香はコンビニの前で立ち止まる。

晴香「私、昔、仕事辞めた時、みんなに『次はどうするの』って言われたの。次なんか、まだ分かんないのに」

直人「……うん」

晴香「その人は、次を無理やり決めなかったんだね」

直人は、佐伯の声を思い出す。

○４６　小さなレストラン（同日・夜）

晴香と直人の初めての、仕事の話をほとんどしない夕食。

晴香「三浦さんって、映画観に行く？」

直人「たまに。一人で」

晴香「私は一人でも行くよ。泣いたあと、顔を誰にも見られないから」

直人「え、泣くんですか」

晴香「泣くよ、人間だし（笑）」

直人は店員を呼び、追加のデザートをひとつ頼む。

晴香「半分こ？」

直人「……はい」

晴香「ちゃんと聞いてから頼んでよ」

直人「あ。半分こ、します？」

晴香「する」

ふたり、笑う。

晴香が笑いながら、直人の前の不器用なデートの話を聞く。

直人「僕、相手に『何が好き？』って聞かれて、『別に』って。それで『つまらなくてすみません』って」

晴香「え、それ、私なら怒るかも」

直人「怒ります？」

晴香「だって、何も話せないって先に決められたら、もう遊べないじゃん」

直人「……それ、前にも言われた」

晴香「なら二回目で覚えよう」

晴香が笑う。直人が「今は、陶器の話、もっと聞きたい」と言う。晴香の表情がふっと柔らかくなる。

○４７　上司・田島のデスク（初冬・夕）

直人が就業規則と自分の事業内容を書いた紙を差し出す。

直人「副業の手続きをしたいです。競業にならない範囲だけで。会社の情報は使いません」

田島「……この前まで休んでたのに、今度は仕事増やすのか」

直人「はい。でも、睡眠と勤務は守ります」

田島「それ、口だけじゃだめだぞ」

直人「分かってます」

田島「会社のルールは人事に確認。判断はそれから」

田島は一度直人を見上げる。

田島「前より、ちゃんと話すようになったな」

直人「……そうですか」

田島「ああ。助かる」

○４８　市役所近くの商工相談窓口（初冬）

開業届の準備。契約書の修正。業務中の事故に備える保険の資料。

直人のノートは最初の一冊から三冊になった。

相談員「名前、決めました？」

直人「『はこぐみ』にしようかと。梱包する人たち、みたいな」

相談員「いいですね。一人でも『ぐみ』なんだ」

直人「……そのうち、二人になれたら」

相談員は笑う。直人も照れくさそうに笑う。

○４９　商店街・小さな看板の前（冬）

古い事務所の空室に『はこぐみ　発送作業サポート』と紙の看板を掲げる。まだ倉庫はない。委託先の店内で業務をする。

晴香がテープの端を押さえる。

晴香「ちょっと曲がってる」

直人「え、どっちに」

晴香「右。……あ、今度左」

直人「もういい？」

晴香「待って、私がやる」

晴香が貼り直す。二人で離れて眺める。

晴香「……社長さん」

直人「やめてください、恥ずかしいから」

晴香「まだお客、二軒」

直人「それも言わないで」

ふたり笑う。紙の看板が風で少し浮く。

直人は看板をスマートフォンで撮る。その場で投稿しようとして、アカウントのフォロワーが七人しかいないことに気づく。

直人「……誰も見てない」

晴香「私が見てる」

直人「一人か」

晴香「一人目がいるじゃん」

直人は写真を投稿する。数分後、石田がいいねを押す。

晴香「二人目」

直人は大きく笑う。

○５０　商店街・居酒屋（冬・夜）

小野がささやかな開業祝いをしてくれる。

小野「三浦さん、会社辞めちゃうんですか」

直人「まだ。生活できないよ」

小野「そっか。……でも、なんかいいですね」

直人「お前も今の部署、どう？」

小野「困ることはあるけど、前より言えるようになりました。三浦さんも言うようになったから」

直人は照れる。

小野「いつか雇ってくださいよ」

直人「その前に俺が自分の給料出せるようにならなきゃ」

小野、乾杯する。

○５１　年明け・ジム（朝）

直人の身体は少し厚みを増した。顔つきが変わり、歩く時にうつむかない。

鏡の前で自撮りしようとして、やめる。

千尋「撮っといたら。最初の写真、残ってる？」

直人「あります。見たくないけど」

千尋「過去の自分に厳しすぎ」

直人「……前の自分、嫌いだったんで」

千尋「今は？」

直人「……今は、ちょっと、ましです」

千尋「それで十分」

直人は以前の写真を、消さずに保存する。

○５２　商店街・凪の器（冬・夕方）

晴香の取引先から「梱包が丁寧でよかった」とメール。晴香が嬉しそうに見せる。

晴香「見て。商品じゃなくて、梱包のこと書いてる」

直人「僕の手柄ってこと？」

晴香「半分だけね」

直人は笑う。

晴香が棚の奥から、初めて彼に渡したものと同じ形の、欠けていない湯呑みを出す。

晴香「これ、売り物。買う？」

直人「……買います」

晴香「一割引きにしとく」

直人「そこは無料じゃないんだ」

晴香「だって商売だから」

晴香が小皿を新聞紙で包む。直人は受け取った湯呑みを大事そうに持つ。

晴香「使ってね。飾るだけだと、ちょっと寂しい」

直人「……欠けたほうも、使ってる」

晴香「え、まだ？」

直人「毎朝」

晴香は少し驚き、顔をそらす。照れたのだ。

晴香「……洗う時、気をつけて。縁、危ないから」

直人はうなずく。その翌朝、直人の食卓に二つの湯呑みが並ぶ。

○５３　駅前・映画館の出口（冬・夜）

ふたりで映画を観てきた。人波を抜ける。

晴香「どうだった？」

直人「……よかった。途中で泣きそうになった」

晴香「どこで？」

直人「お父さんが、最後までうまく謝れないところ」

晴香「私、あそこ嫌いだった」

直人「えっ」

晴香「『言わなくても分かる』って、分かんないよ」

直人は考える。歩きながら晴香の手に一度触れる。晴香は逃げない。

直人「……手、つないでいい？」

晴香「今、もうちょっと触ったじゃん」

直人「……はい」

晴香が手を伸ばす。ふたりは並んで歩く。

○５４　アパート（夜）

直人が机に座り、佐伯からもらったレシートを手に取る。『５分』の字が薄くなっている。

晴香からのメッセージ『今日、楽しかった』。

直人『僕も。また行きたい』と打って送信する。以前のように文章を十回直さない。

机の端には、起業の書類。彼はレシートを透明なカードケースに入れる。

○５５　雑貨店・倉庫（冬・昼）

急に注文が増え、石田の店では発送が追いつかない。直人が応援に入っている。

石田「来月も同じ数だったら頼める？」

直人「今の人数だと、全部は無理です」

石田「そこ、何とかしてよ」

直人「無理して間違えるほうが怖いです。別の作業会社さんと組めないか探します」

石田「……分かった。無理って言ってくれて助かった」

直人は会釈しながら、もう一度、手元の予定表を確かめる。

石田は紙の一覧を見ながら、すこし声を落とす。

石田「前の代行に全部任せた時、一回、客の名前間違えた。返金だけじゃ済まなかった。もう来なくなったお客さんもいた」

直人「……はい」

石田「無理してできるって言われるのが、一番怖い」

直人は、昔、田島に『一人でできます』と言った自分を思い出す。

直人「……今の自分ができる範囲で、やります」

石田「それで頼む」

○５６　地元の交流会・貸会議室（早春・夜）

小規模商店や事業者が集まる。直人、名刺を配るのにも慣れてきた。

川原信夫（五十九）が直人の話を聞く。

川原「物流の人って、でっかい倉庫やってるイメージだけど」

直人「僕は倉庫持ってないです。お店の中の、伝票とか梱包の段取りから」

川原「へえ。地味だね」

直人「はい。すごく地味です」

川原は笑う。

川原「でも、そこが一番困るんだよ。うちの店長に話してみな」

直人は一瞬、昔の自分を思い出す。今度は目を逸らさない。

○５７　駅前・雨のバス停（春）

晴香と直人が相合傘で待つ。直人が会社の問題を愚痴る。

直人「人、雇ったら楽になるかと思ったら、もっと大変になりそうで」

晴香「一人で全部やってるからでしょ」

直人「人に頼むの、まだ苦手だな」

晴香「そういうのさ、苦手って言えるようになったのは進歩じゃない？」

バスの接近表示がつく。

晴香「今日、うち来る？　余ったカレーある」

直人「……行っていいの？」

晴香「聞かれると恥ずかしいね」

直人は笑う。傘を少し晴香のほうへ寄せる。

第三部　人が集まる場所

○５８　貸事務所・朝（春）

狭い部屋に机二つ。段ボールの匂い。アルバイトの応募者・斎藤里沙（四十五）が履歴書を置く。

里沙「梱包なら十年やってます。子どもの迎えがあるから、三時には帰ります」

直人「……三時ですね。大丈夫です」

里沙「ほんとに？　前の職場、毎回『今日は少しだけ』って」

直人「僕、そういうの、言わないようにしたいです」

里沙「『したい』ね（笑）。じゃ、試してみます」

直人が勤務表を作る。里沙は「ここの番号、もっと大きく」と赤ペンを入れる。

直人「……すみません」

里沙「謝らなくていい。見えればいいの」

直人は赤ペンを受け取り、数字を大きく印刷し直す。

面接の終わり、里沙が段ボールの並んだ棚を眺める。

里沙「この棚、もうちょい低くできる？　背の低い人が毎日ここから取るの、大変だよ」

直人「……あ、確かに」

里沙「人を雇うって、机増やすだけじゃないんだよ」

直人はメモを取る。少し前なら、自分が責められたと思っただろう。

直人「教えてください。知らないこと、多いんで」

里沙「言ったね。遠慮なく言うよ（笑）」

○５９　凪の器・作業場（春・午後）

晴香が新作の花器を検品している。直人が発注の一覧を持ってくる。

晴香「この形、箱に入る？」

直人「今の規格だと、緩衝材が多くなるね」

晴香「じゃあ、私が形を変える？」

直人「いや、作品を変える必要はないよ。箱探す」

晴香「……そういうこと、言えるようになったんだね」

直人「何が？」

晴香「前なら、たぶん、無理して『大丈夫』って言った」

直人は返事に困る。晴香は笑い、窯へ戻る。

○６０　小さな事務所・夕

里沙が出荷記録を渡す。

里沙「三浦さん、今日のぶん、終わりです」

直人「ありがとうございます。……明日なんですけど、急に百件入るかもしれなくて」

里沙「かもしれない、で残業はできないよ」

直人「ですよね。すみません」

里沙「別の日に予約できないか、お客さんに聞いてみたら？」

直人は驚く。

直人「……そうか」

里沙「そうか、じゃなくて、やってみ」

直人が電話する。客は翌々日で問題ないと言う。里沙は腕時計を見て帰る。

○６１　駅前・休日の待ち合わせ（春・昼）

直人と晴香。直人は白いシャツに、似合うジーンズ。

晴香「今日、ちゃんとしてる」

直人「いつもちゃんとしてるよ」

晴香「昨日、箱のテープ、腕についてた」

直人「……言ってよ」

晴香「言ったら取ったでしょ」

直人は笑う。通りすがりの女性が直人を見て、ちらりと振り返る。本人は気づかない。

晴香「……最近、モテそうだね」

直人「え？」

晴香「え、じゃない（笑）」

直人が少し照れ、手を伸ばす。晴香が手を取る。

晴香は、すれ違う若いカップルの会話を聞いて笑う。

晴香「私たち、仕事の話ばっかりだったもんね」

直人「……嫌だった？」

晴香「嫌じゃない。でも、ほかのことも話したい」

直人「じゃ、今夜は何の話する？」

晴香「……何も決めないで歩く話」

直人は笑って歩幅をゆるめる。晴香は彼に並ぶ。

○６２　商店街・取引先の店（初夏）

直人の仕事ぶりが評判になり、紹介で客が増える。すぐに受けきれず、いくつか断る。

川原「三浦くん、うちの二店舗も面倒みてよ」

直人「確認してから返事します。今は人手が足りなくて」

川原「会社始めて一年も経ってないのに、ずいぶん慎重だな」

直人「最初、迷惑かけたことがあるんで」

川原「いいねえ。それ、若いのになかなか言えないよ」

直人は少し頭を下げる。

○６３　取引先・昼食会（初夏）

川原が直人を焼き魚定食の席に呼ぶ。ほかの経営者が二人。

川原「これが、最近評判の三浦くん。若いのに、ちゃんとしてる」

社長Ａ「独身？」

直人「……付き合ってる人がいます」

社長Ａ「早いな（笑）。うちの娘、ちょうど同じくらいなんだよ」

川原「おい、仕事の話しろよ」

みんな笑う。直人も笑う。心のどこかがくすぐったい。

以前なら自分を見てもくれなかった人たちが、名前を覚えている。

○６４　商店街・居酒屋（その夜）

直人が小野と食事。小野は同じ席で飲み物を選んでいる。

直人「今日、お客さんに娘さん紹介されそうになった」

小野「え、社長じゃないですか」

直人「なんか変な感じ。去年まで誰とも話してなかったのに」

小野「三浦さん、去年もいましたけどね」

直人「……そうなんだよな」

小野「俺は今の三浦さんのほうが話しやすいです。でも昔の三浦さんも、仕事、ちゃんと見てくれてました」

直人「……俺、見てた？」

小野「見てた。見てるだけだったけど（笑）」

直人は箸を止める。大きく笑う。

小野がグラスを置く。

小野「俺、前に一回、会社辞めようと思ってたんです」

直人「知らなかった」

小野「言わなかったから。三浦さんも何も言わなかったし」

直人「……ごめん」

小野「でも、戻ってきてから、ちゃんと話しかけてくれた。それで、もう少しやろうって思えたんですよ」

直人は言葉を探す。

直人「……それは、お前が頑張ったからだろ」

小野「いや、三浦さんも、一個だけ」

ふたり笑う。

○65　直人の実家（初夏・休日）

妙子が息子を見て「痩せた？」と言い、すぐ「いや、肩が大きくなった？」と言い直す。

直人「どっちだよ」

妙子「背中が広い。狭い服着てるんじゃない？」

直人、古い台所で皿を洗う。

妙子「前は、電話しても声が小さくて、何言ってるか分からなかった」

直人「……ごめん」

妙子「謝らなくていいよ。怖かっただけ。あの晩」

直人、手を止める。

妙子「今でも、たまに怖い。でも、今日はちゃんと顔が見える」

直人は何も言わない。水を止め、母が使った茶碗も洗う。

妙子が昔のアルバムを出す。中学の運動会で、端のほうに写る直人。

妙子「この頃から、目立つの嫌いだったね」

直人「……そんなことない。リレー出たかった」

妙子「え、言わなかったじゃない」

直人「言ったら笑われると思ってた」

妙子は写真を見つめる。

妙子「私、あなたが何考えてるか、分かってるつもりだった」

直人「俺も、自分で分かってなかったよ」

親子は写真をしまう。食卓には二人分のみかん。

○６６　事務所・初めての給料日（初夏）

里沙と、もう一人の短時間スタッフ・瀬戸が受け取った明細を確かめる。直人は緊張している。

里沙「ちゃんと入ってる。ありがと」

直人「当たり前です」

里沙「当たり前って難しいのよ」

里沙たちが帰った後、直人は通帳を見つめる。会社の残高は思ったほど残っていない。

晴香に電話。

直人「給料、払えた」

晴香（電話）「よかったね」

直人「うん。……僕の分、ほとんどないけど」

晴香「ご飯ならあるよ。今夜、来る？」

直人「行く」

直人はノートに『来月も払う』と書く。

○６７　駅前のカフェ（初夏・夕方）

昔の大学の同級生・拓也が直人を誘った。前に誘われなかった飲み会の中心人物。

拓也「久しぶり。会社やってるって聞いてびっくりしたよ」

直人「まだ、ほんとに小さいやつ」

拓也「いやいや、すごい。来週、何人かで集まるんだけどさ」

直人「……前も集まってたよね」

拓也「え」

直人「写真、見た。……俺、誘われなかった」

拓也が言い訳を探す。

拓也「悪い。なんか、三浦、いつも断るからさ」

直人は驚くが、思い当たる。しばらく考える。

直人「……そうだったかも。今度は行くよ」

拓也がほっと笑う。直人は、すべてが悪意だったわけではないと初めて知る。

○６８　交流会の二次会・居酒屋（初夏・夜）

直人が経営者たちと笑っている。以前は店の端で一人だった男が、今は話の中心に呼ばれる。

女性経営者「三浦さん、今度うちのイベントにも来てください」

直人「ぜひ。何やってるんですか」

女性経営者「雑貨の展示会。独身なら、うちの友達も……」

直人「実は付き合ってる人が」と答える。

女性経営者「あら。残念（笑）」

帰りの電車。楽しげな写真が送られてくる。直人は嬉しい。しかし、写真の中の自分が少しよそよそしく見える。

女性経営者は社長という呼び名ではなく、直人の仕事の中身に興味を持って話しかける。

女性経営者「誰が作業しても間違いにくいって、簡単そうで難しいですよね」

直人「はい。でも、現場で毎日見てる人に聞くのが、一番早かったです」

女性経営者「うちも悩んでるから、相談したいな」

直人は礼を言い、名刺を渡す。以前なら、女性に話しかけられたというだけで意味を探していた。今は、相手の話がおもしろい。

○６９　ジム・トレーニングエリア（初夏）

直人は以前より重い重りを上げる。千尋が補助する。

千尋「いいよ。無理しない」

直人「ここまで、時間かかったな」

千尋「一年くらい？」

直人「最初の日、体験だけで帰りたかったです」

千尋「知ってる。入口で靴、ずっと見てたもん」

直人が笑う。

千尋「今は仕事も忙しそうだね。寝てる？」

直人「六時間は」

千尋「じゃ、今日はそこで終わり」

直人は少し残念そうにするが、従う。

千尋「見て。姿勢が変わった」

千尋が最初の日のチェック表を持ってくる。肩が丸く、視線が床を向いていた。

直人「僕、すごい顔してますね」

千尋「そりゃ、初めての場所だもん。緊張するよ」

直人「昔の写真、消したい時もある」

千尋「消さなくてもいいし、見せなくてもいいよ。自分のだし」

直人はうなずく。身体が変わったことより、他人の目をそんなに気にせずに済むようになったことが、今はうれしい。

○７０　凪の器・夕方

晴香がネット注文のメールを見る。直人は作業の効率化を提案しかける。

晴香「今日ね、一個だけ、すごいうれしい注文があって」

直人「何？」

晴香「前に買ってくれた人が、結婚のお祝いにって、また頼んでくれた」

直人「いいじゃん」

晴香「うん。三年前、店やめようと思ってたから、こういうの、まだ慣れない」

直人「……三年前？」

晴香「売上なくて。会社員に戻ろうかなって」

直人「聞いたことなかった」

晴香「聞かれなかったからね」

直人は少し反省した顔になる。晴香、笑う。

晴香「責めてないよ。ただ、私にも前があるって話」

直人は作りかけの提案を閉じ、晴香の話を続けて聞く。

晴香「私、前に働いてた会社、好きだったんだよ。辞める時、けっこう泣いた」

直人「好きなら、続ければよかったのに」

晴香「そういうことじゃない。好きでも、続けられないこと、あるから」

直人は返事を待つ。

晴香「それを誰かに分かってもらえなくて、腹立ったんだよね」

直人「……それは、つらかったね」

晴香「うん」

晴香は、初めて自分から直人の肩に触れる。

○７１　近所の公園（梅雨明け・午後）

晴香が散歩しながら言う。

晴香「ねえ、三浦くん。……一緒に住まない？」

直人が立ち止まる。

直人「……本当に？」

晴香「何その、当選したみたいな顔」

直人「嬉しくて」

晴香「もちろん、仕事のことはちゃんと話そうね。私の工房は別で続けたいし」

直人「うん。絶対」

晴香「『絶対』って言うと怪しいな」

直人「……ちゃんと話します」

晴香「それならいい」

ふたりはコンビニで新しいスリッパを見て、どれがいいか延々と迷う。

○７２　事務所・繁忙日（夏）

出荷伝票、電話、汗。スタッフ二人が忙しそうに動く。直人はお客への謝罪を終え、ホワイトボードを書き換える。

里沙「社長、顔怖い」

直人「え、怒ってないです」

里沙「分かってる。けど、怖い。水飲んで」

直人は水を飲む。笑って「ありがとうございます」。

瀬戸「うちも、二年前は二人でやってたんだよね？」

直人「僕一人と、店の人に手伝ってもらって……」

里沙「その頃の写真ある？」

直人「……見ないほうがいいです」

スタッフたちが笑う。直人も笑う。

○７３　商店街・川原の事務所（夏・夕方）

川原が直人に正式な契約書を渡す。店舗数を増やした定期契約。

川原「三浦くん、こっからは顔だけじゃなくて、数字も見るからね」

直人「はい。月ごとに報告します」

川原「あと、今度、家族も呼んで食事でもしよう」

直人「家族？」

川原「奥さんでも彼女でも、連れてきな」

直人は思わず「まだ結婚は……」と言ってしまう。

川原「『まだ』なんだ（笑）」

ふたり笑う。

○７４　取引先主催の会食・個室（夏・夜）

直人と晴香が川原の家族と食事。川原の娘・理恵（二十八）は仕事帰りのスーツ姿。気さくに話す。

川原「うちの娘も起業に興味あるんだよ。三浦くん、教えてやって」

理恵「お父さん、それ昨日も言った」

晴香「起業したいんですか？」

理恵「したいっていうか、考えてるだけです。今の仕事、辞めるか迷ってて」

直人「……考えてるだけでも、大変ですよね」

理恵「そう。だから、急かさないでよ」

理恵が父に言う。川原は頭をかく。

川原「うちの娘、口が達者でな」

晴香「いいことだと思います」

食卓が笑いに包まれる。直人は、自分が歓迎されていることを静かに喜ぶ。

○７５　会食の帰り道（夜）

晴香が直人の腕を軽く叩く。

晴香「今日、立派だったね、社長さん」

直人「やめてよ」

晴香「でも理恵さん、おもしろい人だった」

直人「うん。お父さんのほうが緊張してたね」

しばらく歩く。

直人「去年の今頃、僕、ああいう店に入るだけでも怖かった」

晴香「そっか」

直人「今、なんか、みんなが話しかけてくれる。ちょっと信じられない」

晴香「うん。でも、私は段ボール抱えてた時の三浦くんも知ってるよ」

直人「……ひどい顔してたでしょ」

晴香「それは、してた（笑）」

直人は笑う。ふたりが笑いながら信号を渡る。

次の信号が赤に変わり、晴香は立ち止まる。

晴香「ねえ、今日のご飯、私の話も聞いてくれてた？」

直人「聞いてたよ。新しい窯のことでしょ」

晴香「そう。実は、ちょっと怖い。大きい買い物だから」

直人「……どうするつもり？」

晴香「迷ってる。だから、もう少し迷わせて」

直人「分かった。いつでも聞くよ」

晴香が「ありがと」と言う。直人はうなずく。

○７６　アパート・引っ越し準備（夏・週末）

晴香が直人の部屋で本を箱詰め。机の上にカードケース入りの古いレシートを見つける。

晴香「これ、捨てていい？」

直人「待って。それは……」

直人が受け取る。裏に『５分』。紙が黄ばんでいる。

晴香「前に言ってたおじさん？」

直人「うん」

晴香「そういえば、探した？」

直人「……まだ」

晴香「会いたい？」

直人「うん」

晴香は箱のふたを閉める。

晴香「じゃ、行ってみたら。仕事、早く終わる日に」

直人はレシートを財布に戻す。

○７７　ジム・受付（夏・夜）

千尋に直人が話す。

直人「見つけたい人がいるんです」

千尋「警察沙汰？」

直人「違います（笑）。去年、たまたま会った人」

千尋「連絡先は」

直人「ない。名前だけ」

千尋「それは難しいな」

直人「ですよね」

千尋「でも、行かないと分かんないんじゃない？」

直人は笑う。

直人「……千尋さんも、言うこと同じだ」

千尋「誰と？」

直人「その人と」

○７８　多摩川沿い・ベンチ（夏・夜）

あの夜と同じベンチ。直人が座っている。隣に温かいお茶を一本置く。

犬の散歩の人。ジョギングの人。学生たち。佐伯はいない。

直人は缶を二本持って帰る。

○７９　同・ベンチ（翌週・夜）

雨上がり。直人はしばらく待ってから帰る。途中、小さな清掃車とすれ違う。運転手は若い男。

直人が「佐伯さんを知りませんか」と聞く。

清掃員「俺、ここ来たばっかなんで……すみません」

直人「いえ、ありがとうございます」

直人が見上げると、工事用の囲いが新しくできている。世界は、あの夜のままではない。

○８０　公共施設の管理事務所（昼）

直人が佐伯について尋ねる。受付の職員は慎重な表情。

職員「勤務していたかどうかも、こちらからはお話しできないんです」

直人「ですよね。……これ、渡せることがあったら、お願いします」

封筒には『佐伯さんへ。三浦です。あの夜のお礼を言いたくて』。自分の連絡先もある。

職員「お預かりできるか、担当に確認します」

直人、頭を下げる。無理に尋ねない。

直人は連絡先のメモの裏に、短い言葉を添える。

『あの夜、帰りたくないと話していた者です。元気になりました。何かお願いがあるわけじゃありません。ただ、お礼を言いたいです』。

封筒の宛名に「佐伯様」。役所や会社が個人情報を出せないことも理解した上で、できる範囲のお願いだけを残す。

帰り道、直人は晴香に『預かってくれそう』と送る。返事『よかった。牛乳忘れないで』。直人は牛乳を買う。

○８１　事務所・昼（数日後）

電話が鳴る。知らない番号。

直人「はい、はこぐみです」

男の声「……三浦さん？」

直人「はい」

男の声「佐伯です。お茶の」

直人の手が止まる。作業場の音が遠くなる。

直人「……佐伯さん？」

佐伯（電話）「こんな番号で、会社の人に迷惑かけたかな」

直人「全然。……いや、待ってください。今、ちょっと」

直人は外に出る。電話を持つ手が震えている。

直人「ずっと、会いたかったんです」

電話の向こうで、佐伯が小さく息をつく。

佐伯「……そうか。じゃ、今度、お茶でも」

○８２　駅前・待ち合わせ（翌週・夕方）

直人が約束より早く来ている。通る人を何度も見る。スーツの自分がガラスに映る。

少し離れた場所から、杖をついた佐伯が現れる。背は同じなのに、ひどく小さく見える。髪も白くなっている。

直人が駆け寄る。

直人「佐伯さん！」

佐伯「おお。……お前、あの時の」

直人「三浦です」

佐伯「分かってるって（笑）。ずいぶん、変わったな」

直人「……はい」

佐伯「俺は、あんまり変わってねえけど」

佐伯は笑う。笑いの終わりが少しだけ疲れている。

○８３　駅前・昔ながらの喫茶店（夕方）

直人が勢いよく話す。仕事、ジム、開業、晴香。名刺を出す。写真を見せる。

直人「最初は全然だめで。でも、佐伯さんが言ってくれた通りに……」

佐伯「俺、そんなに何か言ったか？」

直人「言いました。『戻れなきゃ別の道探せ』って。ジムとか、好きなこと探せって」

佐伯「……そうか。覚えてたんだな」

直人「全部じゃないです。でも、あの日から、毎朝、五分歩いたんです」

直人がカードケースからレシートを出す。佐伯は目を細める。

佐伯「こんなの、まだ持ってたのかよ」

直人「僕、ほんとに、助けてもらったんで」

佐伯は笑ったまま、目線を落とす。

佐伯「で、今は、仕事やってる人が周りにたくさんいるんだろ？」

直人「はい。昔は飲み会とか怖くて、いつも断ってました。今は、たまに断りたいくらい」

佐伯「それも大変だ（笑）」

直人「女性にも、話しかけてもらえるようになって。……あ、彼女がいるんです」

佐伯「おお。よかったな」

直人「本当にいい人です。僕が前のままだったら、たぶん出会えてなかった」

佐伯「前のお前だって、ここには座れただろ」

直人「……そうですね」

佐伯はそれ以上言わない。直人は、努力だけでは説明できない出会いがあったことを思い出す。

○８４　喫茶店・続き

店員が注文を聞きに来る。

佐伯「ホット。小さいので」

直人「僕も同じので」

佐伯が立ち上がる時、腰に手を当てる。

直人「大丈夫ですか」

佐伯「大丈夫、大丈夫」

直人「仕事、まだ清掃ですか？」

佐伯「いや。辞めた」

直人「え」

佐伯「腰やっちゃってね。もう、あの時間は無理だ」

直人「じゃ、今は？」

佐伯「病院行ったり、役所行ったり。働けるとこ探してる」

直人は一瞬、答える言葉を失う。

○８５　喫茶店・少し後

直人「佐伯さん、うちの会社来ませんか」

佐伯「会社って、あの『はこぐみ』？」

直人「軽い仕事ならあると思います。あと、部屋も、知り合いに聞けるし」

佐伯「おいおい、早いな」

直人「でも、仕事ないと困るでしょう」

佐伯「困るよ。そりゃ困るけど」

直人「僕、助けたいんです。あの時みたいに」

佐伯がカップに触れ、手を止める。

佐伯「……三浦くん。今日は、俺の話も聞いてくれる？」

直人は言いかけた言葉を飲み込む。

直人「……はい」

佐伯は、すぐには話し始めない。

第四部　帰れなかった人

○８６　喫茶店・窓際（夕方）

佐伯がコーヒーを一口飲む。

佐伯「娘がいるんだ。七海っていう。もう、何年も会ってない」

直人「……そうなんですか」

佐伯「嫁さんが病気になった時さ、俺、仕事ばっかりだった。七海が病院行って、家のことやって、孫の世話して」

佐伯の親指がカップの縁をこする。

佐伯「俺、バス運転して、家に金入れてた。ちゃんとやってると思ってた」

直人「……はい」

佐伯「でも娘に『一日でいいから、代わって』って言われた時、俺、『休めるわけないだろ』って」

直人は、続きを急がせない。

佐伯「昔、七海が二十歳の時、バスの運転士になりたいって言ったことがあってさ。俺が『やめとけ、体きついぞ』って笑ったんだ」

直人「……そうだったんですね」

佐伯「今思えば、本気だったのかもな。聞いてやればよかった」

直人「今は、何の仕事を？」

佐伯「それも、ちゃんと知らないんだ」

佐伯は自分の手の甲を見る。皺の間に、古い傷が残っている。

佐伯「お前の話は、こんなに聞けるのにな」

○８７　佐伯家・台所（七年前・夜）

記憶の断片。二十代の七海が洗い物をしながら、子どもの泣き声に振り向く。テーブルには介護の書類。修は運転士の制服を脱いだばかり。

七海「明日だけ、病院ついてってくれない？　私、会社に一回行かないと」

修「明日、朝番なんだよ」

七海「分かってる。いつも分かってる」

修「俺だって好きで働いてるわけじゃない」

七海「じゃ、私が好きでやってると思ってる？」

修、返せない。七海は台所の電気を消す。

○８８　喫茶店・現在

佐伯「亡くなった時もさ。娘が泣いてるのに、『いつまでも泣いてたら、母さん心配するぞ』なんて」

佐伯は言ってから、自分で首を振る。

佐伯「心配してたのは、俺だよ。泣く娘、見てるのが嫌だった。自分が何もしなかったの、分かってたから」

直人「……七海さんは、何て」

佐伯「『お父さんは最後まで、私の話を聞かなかった』って。それっきり」

佐伯はカップを置く。

佐伯「他人には偉そうなこと言えるのにな。自分の娘には、何を言ったらいいか分かんねえ」

佐伯は、七海が子どものころ、バスの運転席を見に来るのが好きだったことを話す。朝一番の便に乗って、終点まで行って、また戻った。

佐伯「昔は、俺が帰ると、何でもしゃべる子だったんだけどな」

直人「……はい」

佐伯「何も話さなくなったの、急じゃなかったんだろうな。俺が気づかなかっただけで」

直人は静かに聞く。佐伯はしばらく涙をこらえ、結局泣かない。

○８９　喫茶店・店外（夕）

店の前。人々が行き交う。佐伯が杖を持ち替える。

直人「会いたいですか。娘さんに」

佐伯「……会いたいよ」

直人「だったら」

直人は『連絡して』と言いかけ、止める。

直人「……怖いですよね」

佐伯「怖いね。俺が、あの子の人生を邪魔してたらどうしようって」

直人は少し考える。

直人「僕、あの日、佐伯さんに『五分でいい』って言われました」

佐伯「うん」

直人「今、何か五分でできること、ありますか」

佐伯は笑おうとして、うまく笑えない。

佐伯「……手紙、一行くらいかね」

直人「一行なら、一緒に考えられます」

○９０　晴香のアパート・台所（夜）

晴香がにんじんを切っている。直人は仕事の書類を見ながら、佐伯の話をする。

直人「仕事、紹介できるかもしれない。でも、それどころじゃなさそうで」

晴香「その人、仕事紹介してほしいって言ったの？」

直人「言ってない」

晴香「じゃ、何してほしいって言ってた？」

直人は少し考える。

直人「……娘さんに、手紙を書きたいって」

晴香「じゃ、まず、それじゃない？」

直人がうなずく。

晴香「あと、腰痛い人に梱包させるのは、やめたほうがいいと思う」

直人「……ほんとだな」

晴香、笑う。「はい、皿取って」。直人が皿を出す。

○９１　佐伯の住む簡易宿泊施設・入口（週末）

狭い廊下。共同の洗濯機が動いている。佐伯はここで暮らしている。

佐伯「散らかってるから、入るなよ」

直人「分かりました」

直人は入口で待つ。部屋から佐伯が折れた封筒と便箋を持って出てくる。

佐伯「こっちのテーブル、使っていいって」

共有スペースに座る。佐伯が紙に『七海へ』と書き、そこで止まる。

直人「……急がなくていいです」

佐伯「俺、書くよりしゃべるほうが得意だと思ってたんだけどな」

直人「前はバスの運転手さんだったんですよね」

佐伯「案内放送は上手かったぞ。毎日同じこと言ってたから」

ふたり、少し笑う。

共同スペースの窓から夕日が差す。修の部屋から、古いバスの運転士の帽子が少し見える。

直人「……帽子、まだあるんですね」

佐伯「捨てられなくて。バス、好きだったんだよ」

直人「それ、いいことじゃないですか」

佐伯「好きな仕事でも、続けられない時が来るんだな」

直人は簡単に励まさない。佐伯は部屋の戸をそっと閉める。

○９２　共有スペース・続き

佐伯が書き始める。

佐伯「『あの時は仕事が忙しくて』……違うな」

消す。

佐伯「『お前のために』……これも違う」

直人「……僕、文章は得意じゃないです。でも、七海さんに一番言いたいこと、何ですか」

佐伯「……一人でやらせて、悪かった」

直人は何も書き足さない。

佐伯がゆっくり、同じ言葉を便箋に書く。手が震える。しばらくして続ける。

佐伯「『母さんのこと、お前一人に任せた。あの時のことを、ちゃんと謝りたい。返事は無理しなくていい』」

佐伯は読み返す。

佐伯「……言い訳、入ってないか」

直人「入ってないと思います」

封筒の裏に、佐伯は差出人として自分の名前を書く。七海の名前を書く時より、ずっと時間がかかる。

佐伯「こんな短い手紙、失礼じゃねえかな」

直人「……僕なら、短いほうが読めるかもしれないです」

佐伯「お前なら？」

直人「僕だったら、です。七海さんの気持ちは分かりません」

佐伯「……そうだな」

佐伯は最後に一文字を消し、書き直す。直人は急がせない。

佐伯は封筒を閉じる。切手はまだ貼らない。

○９３　事務所・昼（翌週）

川原の会社から急ぎの注文。直人がスタッフに確認する。

里沙「今日の分に加えたら、ミス出るよ」

直人「分かりました。先方に、明日の発送でお願いしてみます」

彼は電話をかける。断られる。取引の一部が別会社へ回る。

電話を置いて、直人は深呼吸。

瀬戸「社長、残念でしたね」

直人「残念。でも、無理してお客さん困らせるよりいい」

里沙「そういう顔してないよ」

直人「……ちょっと悔しい」

里沙は笑って、次の箱を組み立てる。

○９４　市の相談窓口・待合室（午後）

佐伯と直人。佐伯の腰の状態と仕事の相談、住まいと生活の手続きについて、担当職員が説明する。具体的な支援の対象になるか確認が必要だ。

職員「今できることを順番に見ていきましょう。書類も、一度に全部はそろわないと思います」

佐伯「……面倒かけて、すみません」

職員「手続きのために、ここがあるので」

佐伯は初めて少し顔を上げる。

帰り、直人は自販機の前で立ち止まる。

直人「お茶、飲みます？」

佐伯「今日は、俺が買う」

佐伯は硬貨を探す。直人は待つ。

○９５　佐伯の部屋・夜

佐伯が手紙を出しかけ、ポストの前で立ち止まる。古い住所が書かれている。まだ娘が住んでいるか分からない。

しばらくして、郵便局の窓口で宛先確認の方法を尋ねるが、家族の最新住所を教えてもらうことはできない。

佐伯は手紙を持ち帰る。直人に短い電話。

佐伯（電話）「すぐには出せそうにない」

直人「そうですか」

佐伯「がっかりした？」

直人「……ちょっと。でも、出せなくても、書けましたよね」

佐伯「……そうだな」

○９６　佐伯の昔の住まいの近く・昼

修が娘と最後に住んでいた家の前を通る。表札は別の名字。

修は立ち止まらずに歩き、近所の知り合いの女性と偶然出会う。彼女は七海が転居したことを知っているが、住所は口にしない。

女性「七海ちゃん、元気そうだったよ。この前、商店街で見た」

佐伯「そうか」

女性「……会ってないの？」

佐伯「ちょっと、いろいろ」

女性「本人に話したいなら、私から伝えてみようか」

修は長く迷い、うなずく。

佐伯「……頼めるなら、連絡してほしいってだけ。嫌なら、それでいい」

○９７　七海の家・台所（夜）

佐伯七海（三十六）が娘の花（七）に漢字の書き取りを見ている。夫が洗濯物をたたむ。七海のスマートフォンに、昔の知人からメッセージ。

『お父さん、あなたに連絡を取りたいそうです。返事はいらないって』

七海は黙って画面を閉じる。

花「お母さん、これ、読めない」

七海「どれ」

花「『帰』」

七海「帰る、の『帰』」

七海は子どものノートに字を書いて見せる。途中で手が止まる。

夫「大丈夫？」

七海「うん。……あとで話していい？」

夫「いいよ」

七海が台所の引き出しを開く。母が使っていた古いメジャーカップ。夫が「捨てないの？」と聞く。

七海「……まだ使えるし」

七海は返事をしながら、父が昔作った木製の踏み台を見る。娘の花がそこに立って手を洗っている。

父にいい思い出がないわけではなかった。そのことが、七海をもっと複雑な気持ちにする。

○９８　七海の家・寝室（深夜）

夫が七海の隣に座る。

七海「父が連絡したいって」

夫「……そっか」

七海「今さら何だろうね。あの時、私、仕事も休んで、花まだ小さくて。お父さんはずっとバス乗ってた」

夫「聞いてる」

七海「お母さんが亡くなった時、あの人『泣くな』って言ったんだよ。……泣いてよかったのに」

七海は泣かない。夫は背中に触れる。

夫「返事しなくてもいいよ」

七海「……うん。でも、何て言いたいのか、ちょっとだけ気になる」

○９９　共有スペース・昼（数日後）

佐伯が直人に、知人を通じて七海から届いた短いメッセージを見せる。

『手紙なら受け取ります。今の住所には送らず、山根さんに預けてください』

直人「……よかったですね」

佐伯「まだ何もよくないよ」

直人「……そうですね」

佐伯「でも、読んでくれるんだな」

修は便箋をもう一度開く。封筒に入れ直す。今日はまっすぐ歩いている。

佐伯「俺、返事もらおうとして手紙書いたのかね」

直人「……会いたかったからじゃないですか」

佐伯「会いたいよ。でも、向こうには向こうの生活があるからな」

佐伯は手紙の控えを半分に折る。

佐伯「……会いたいって気持ちと、会わせてほしいって頼むのは、別なんだな」

直人は頷く。あの夜の佐伯より、少し小さくなったようにも、大人になったようにも見える。

○１００　晴香の工房・夕方

晴香が大量の注文を前に座り込んでいる。

晴香「今月、ありがたいんだけど、ちょっと、もう無理」

直人「手伝う？」

晴香「手伝ってほしい。でも今日は仕事の効率化の話はなし」

直人「はい」

ふたりで緩衝材を切る。直人の手は慣れている。

晴香「ねえ、あのおじさん、どう？」

直人「娘さんに手紙、渡せそう」

晴香「そっか」

少し沈黙。

晴香「……私たちも、困ったこと、ちゃんと話そうね」

直人「うん。話す」

晴香が直人にテープを渡す。二人の手が少し触れる。

○１０１　七海の家・夜

七海が封筒を開く。便箋には短い文章。『母さんのことを、お前一人に任せた。あの時、お前が何を言っていたのか、俺は聞こうとしなかった。すまなかった。返事はいらない。修』。

便箋を読んだ七海は、思わず昔の電話帳を探す。子どもの頃、父が夜勤明けに買ってくれたプリンの写真が一枚出てくる。

写真の中の父は、ひどく眠そうなのに笑っている。七海は写真を裏返す。

夫が声をかける。

夫「読めた？」

七海「……うん。怒ってるわけじゃないんだ、今」

夫「うん」

七海「ただ、今すぐ、普通に戻れる気もしない」

夫「戻らなくてもいいんじゃない？　今の場所からで」

七海は小さくうなずき、便箋をしまう。

七海は一度折りたたみ、引き出しに入れる。しばらくして、また出して読む。

娘の花が眠りながら「お母さん」と言う。七海は隣に横になる。便箋は枕元に置いたまま。

○１０２　会社・朝（数週間後）

直人の会社には新しい依頼が来ている。川原の店舗のひとつが契約を更新しなかった。代わりに別の店が小さな依頼を持ってくる。

里沙「相手の都合もあるからね。減った分、ちゃんと計算しよう」

直人「うん」

里沙が顔を上げる。

里沙「今、『うん』って」

直人「……あ、すみません。はい」

里沙「いいよ。『うん』で（笑）」

朝の段ボールが一斉に組み立てられる。会社は小さいが、生きている。

○１０３　多摩川沿い・ベンチ（秋の夕方）

佐伯と直人。しばらく会えずにいた。

佐伯「返事、来ない。手紙、読んでくれたなら、それでいいかと思ったんだけどね」

直人「……そうですか」

佐伯「お前、前なら『もう一通出しましょう』って言ったな」

直人「……たぶん」

佐伯「今は？」

直人「佐伯さんは、どうしたいですか」

佐伯は笑う。

佐伯「それ、答えるの、難しいな」

川の向こうで中学生が自転車を押している。長い沈黙が続く。

○１０４　七海の家・朝（秋）

七海が娘の水筒を用意している。スマートフォンに、父へのメッセージが書かれている。

『今度の日曜日、駅前の喫茶店で十分だけなら』。

打っては消す。夫が子どもの靴を探している。

夫「七海、今日は、あの件？」

七海「……うん」

夫「送っていけばいい？」

七海「大丈夫。一人で行く」

七海は送信する。画面を伏せ、深呼吸する。

送信したあと、七海は急に落ち着かなくなる。

花「お母さん、誰かにメールした？」

七海「……うん。昔の知り合いに」

花「お友達？」

七海「……家族かな」

花は「そっか」と言い、連絡帳を持って行く。七海は、その何でもない反応に少し救われる。

○１０５　佐伯の宿・共有スペース（同日・昼）

修が直人にメッセージを見せる。

佐伯「十分だって」

直人「十分……」

佐伯「お前なら何する、十分で」

直人「……僕、たぶん緊張して、三分で終わります」

佐伯「俺は最初の『久しぶり』が出るか分かんねえ」

直人「じゃ、それだけ練習します？」

佐伯「……やめとく。変に練習すると、たぶん嘘になる」

修は紙を折り、ポケットに入れる。直人は口を出さない。

○１０６　駅前・小さな喫茶店（日曜・午後）

佐伯が早く着いている。娘・七海が店に入ってくる。修は立ち上がろうとして、腰に手を当てる。

七海「座ってて」

佐伯「……久しぶり」

七海「うん」

七海は正面に座り、温かいお茶を頼む。修は何か言おうとして、黙る。

七海「手紙、読んだ」

佐伯「……ありがとう」

七海「お礼言われることじゃないよ」

佐伯「そうだな」

気まずい沈黙。七海は腕時計を見るが、まだ席を立たない。

○１０７　喫茶店・続き

七海「お母さんの病院でね、一回だけ、私、『今日は無理』って言ったの覚えてる？」

修「……覚えてる」

七海「そしたらお父さん、『お前がやらなきゃ誰がやる』って」

修「言った」

七海「私も、誰かに『無理してるね』って言ってほしかっただけなのに」

修は、しばらく下を向いている。

修「……悪かった。一人でやらせた」

七海「うん」

修「仕事、休めなかったんじゃない。休むって言うのが怖かった。家にいても、俺が何すればいいか分かんなかった」

七海「それ、今なら分かるよ。……でも、当時の私は、助けてほしかった」

修「うん」

七海「『泣くな』って言われたのも、ずっと忘れられなかった」

修「……俺も、忘れてない」

七海は紙ナプキンを折り、また伸ばす。

七海「お父さん、私が電話した夜、何回か切ったでしょ」

修「……切った」

七海「こっちは仕事抜けて、病院の廊下から電話してたんだよ」

修「うん。……申し訳なかった」

七海「今さら、そう言われたら、何て返せばいいか分かんない」

修「返さなくていい。今日は、聞く」

七海は、初めて父の顔をまっすぐ見る。修は言い直さず、そのまま待つ。

○１０８　喫茶店・続き

七海がハンカチを出す。泣きそうで、まだ泣かない。

七海「謝ってくれても、昔のことがなくなるわけじゃないから」

修「分かってる」

七海「……花には、まだ会わせられない。私が、ちゃんと考えたい」

修「うん。急がなくていい」

七海は笑ってしまう。

七海「昔のお父さんなら、『もう何年経ったと思ってる』って言ったよね」

修「……言っただろうな」

七海「そう」

修も小さく笑う。テーブルの湯呑みはまだ温かい。

七海「今日は、帰るね」

修「……来てくれて、ありがとう」

七海は帰り際、入口で立ち止まる。

七海「……体、大丈夫なの。杖、前はなかったよね」

修「腰がちょっと。病院、行ってる」

七海「……そう」

七海は財布を取り出しかけ、しまう。

七海「じゃあ、また。……いつか」

修「うん。気をつけて」

七海はうなずき、出ていく。修は、席をすぐには立たない。

○１０９　駅前・夕方

直人が近くの書店で待っている。修から電話。

佐伯（電話）「終わったよ」

直人「……どうでした」

佐伯「話、できた」

直人「よかった」

佐伯「……よかった、のかな」

直人「分かんないです。でも、僕は、うれしいです」

向こうで修が小さく笑う。

佐伯「俺も、少し。……あ、バス来た。またな」

直人は電話を切る。書店の袋には、新しい帳簿の本と晴香の好きな小説。

○１１０　直人と晴香の新居（冬・朝）

狭い二人暮らしの部屋。晴香の陶器が食卓に並ぶ。直人はエプロン姿で卵焼きを作る。少し焦げている。

晴香「また焦げてる」

直人「今回は食べられる」

晴香「前も言ってた」

晴香のスマートフォンに新しい注文。直人が覗きかける。

晴香「これは私が見る」

直人「……はい」

晴香は直人の皿に卵焼きをひと切れ置く。

晴香「でも、梱包はあとで頼む」

直人「それ、仕事？」

晴香「仕事」

直人「じゃ、請求書出す」

ふたりが笑う。

○１１１　会社・年末（冬・午後）

スタッフたちが小さな忘年会の準備。直人が社内の数字を見せる。

直人「黒字です。……ほんのちょっとですけど」

里沙「めでたいじゃん」

小野が会社の外から顔を出す。直人が誘ったのだ。

小野「うわ、ほんとに会社になってる」

直人「いや、前から会社だったよ」

小野「看板、前は紙だったでしょ」

みんな笑う。直人は里沙に挨拶を頼み、隣で聞く。

以前は、人の前で話すことが怖かった。今は、人が話しているのを聞くのが好きだ。

○１１２　佐伯の新しい部屋（翌春）

佐伯は相談を重ね、身体に負担の少ない短時間の仕事と住まいを少しずつ整えている。小さな部屋の窓際に鉢植え。

スマートフォンが鳴る。七海から短いメッセージ。

『花の運動会、来月です。まだ会わせるかは決めてないけど、予定だけ送ります』

佐伯は何度も読み返す。返信欄に『ありがとう』と打ち、送る。

そのまま窓を開ける。外から小学生の声が聞こえる。

○１１３　多摩川沿い・ベンチ（春・昼）

直人と佐伯が缶のお茶を飲む。川のそばでは新入生らしい子どもたちが走っている。

直人　「あの日、僕がここで、あんなこと言ったの、覚えてます？」

佐伯　「覚えてるよ」

直人　「……あの時、佐伯さん、何であんなに待ってくれたんですか」

佐伯　「分からない。……家に帰っても、一人だったし」

直人が笑う。

佐伯　「それに、話したそうな顔してた」

直人　「……めちゃくちゃ嫌な顔してたと思います」

佐伯　「そうだったな（笑）」

直人は懐から古いレシートを出す。『５分』の字はほとんど消えている。

直人　「捨てられないんです、これ」

佐伯　「捨てればいいのに」

直人　「……あの時の僕が、まだここにいる気がして」

佐伯はしばらく見ている。

佐伯　「いたっていいだろ。あの子がいたから、今のお前がいるんじゃないの」

直人は、もらったレシートの裏を指でなぞる。

直人「『五分』って、最初、馬鹿にしてました。こんなので何が変わるんだって」

佐伯「そうだろ」

直人「でも、できた日は、次の日もやろうって思った。できない日は、どうしてできないか考えた。……そのうち、前ほど自分のこと嫌いじゃなくなったんです」

佐伯「……そりゃ、よかった」

直人「佐伯さんが全部変えてくれたわけじゃない。でも、最初の一歩、借りたんです」

佐伯は照れたように笑い、しばらく川を眺める。

直人はレシートを戻す。風で桜の花びらが飛ぶ。

○１１４　ベンチ・続き

直人「佐伯さんに、何か返したいです」

佐伯「もう、十分だよ」

直人「僕、何もしてないですよ」

佐伯「娘に手紙書くとき、黙って座ってただろ」

直人「あれ、何もしてないです」

佐伯「そういう時、何も言わないのが難しいんだよ」

ふたりはしばらく川を見る。

直人「もし、僕みたいな人がいたら……何て言えばいいんでしょうね」

佐伯「さあ。相手の話、聞いてみたら」

直人「それだけ？」

佐伯「一人で抱えきれなきゃ、誰か呼べばいい。俺も、お前のお母さん呼んだろ」

直人はうなずく。

佐伯は昔の路線図を小さく折りたたんで、ポケットから出す。かなり擦れている。

佐伯「昔、終点で降りそびれたお客さんがいたんだよ。俺が『次の便で戻れます』って言ったら、すごい安心した顔して。……そんな仕事だったんだな、って」

直人「……いい仕事ですね」

佐伯「そうだな。まあ、いつも遅れるって怒られてたけど（笑）」

直人は笑う。路線図はしまわれる。誰もそれを教訓にしようとしない。

佐伯は杖を持って立つ。

佐伯「次のバス、そろそろだ」

直人「まだ早いですよ」

佐伯「年寄りは、早めに行くの」

直人も立ち上がる。ふたりでバス停へ歩く。

○１１５　バス停（続き）

佐伯が時刻表を見上げる。途中で目を細める。

佐伯「見えねえな。何分？」

直人「あと六分」

佐伯「おお、六分か」

直人は笑う。

遠くからバスの音。二人は黙って待つ。直人の腕に、晴香から『帰り、牛乳買ってきて』というメッセージ。

直人『了解』と返す。

バスが近づく。佐伯が運転手に軽く会釈する。職業の癖だ。

直人「また、来週」

佐伯「またな」

扉が閉まる。バスが走り去る。直人は反対側の道へ歩き出す。

エピローグ

○１１６　商店街・「はこぐみ」前（二年後・初夏）

看板は少し日焼けしている。里沙と新しいスタッフが忙しそうに段ボールを運ぶ。直人（三十二）は客からの電話を切る。

新スタッフ「社長、すみません。伝票、間違えました」

直人「どれ？　見せて」

新スタッフ「すみません、ほんとに……」

直人「大丈夫。今、どこまで分かってる？」

ふたりで画面を見る。直人は焦らせない。

壁には開業初日の、紙の看板の写真。角が浮いている。

○１１７　商店街・夏の夕暮れ

直人と晴香が、ベビーカーを押して歩く。まだ小さな息子が眠っている。結婚指輪が夕方の光を受ける。

晴香「牛乳、買った？」

直人「……あ」

晴香「社長さん」

直人「戻る」

晴香「私も行くよ。アイス買いたい」

ふたりは笑い、来た道を戻る。

直人のスマートフォンが鳴る。佐伯から写真が届く。少し離れて座る七海と花。三人ともカメラのほうを見ていない。公園のベンチ。添えられた短い文。

『今日は少し話せた。花は、いちごが好きらしい』

直人は返信を打つ。

『よかったですね。また話、聞かせてください』

晴香が「誰？」と聞く。

直人「……佐伯さん」

晴香「何だって？」

直人「今日、いい日だったみたい」

直人はスマートフォンをしまう。息子が目を覚まし、声を上げる。晴香が笑う。

商店街の明かりが、一つずつ点く。三人はスーパーに入っていく。

スーパーでは、直人が迷いながら牛乳を二本かごに入れる。晴香が一つ戻す。

晴香「そんなに飲まないでしょ」

直人「……そうだね」

ベビーカーの息子が笑う。直人は息子に変な顔をして見せる。晴香は小さく笑う。

レジの列が進む。直人はかごを持ち直し、晴香と並んで一歩進む。

（了）